

令和8年度 学校改善支援プラン

I ICTを活用した授業力向上事業

ICTを活用した授業力向上事業 令和7年度モデル校

北管内 八峰町立八峰中学校

中央管内 由利本荘市立鳥海小学校（令和6年度から継続）

南管内 美郷町立仙南小学校（令和6年度から継続）

II 「授業力のキーワード」を活用した「秋田の探究型授業」の充実

III モデル校でのICT活用例

IV 全校体制での研究推進に向けた取組

V 検証改善委員からの提言

秋田県検証改善委員会

I

ICTを活用した授業力向上事業

県教育委員会では、より質の高い「秋田の探究型授業」を目指し、令和6年度から「ICTを活用した授業力向上事業」を実施し、義務教育課指導主事等がモデル校の先生方と共に、「授業力向上」と「ICT活用」を両輪とした授業改善を推進してきました。

検証改善委員会では、「授業力のキーワード」を基にした各モデル校の取組の成果や、今後の取組についての提言等を、本誌「学校改善支援プラン」にまとめました。

「学校改善支援プラン」が、日々の授業づくりや研修会等に活用され、各学校における授業力向上の取組を充実させるための一助となることを願っております。



モデル校との協働による授業改善に向けた取組

検証と成果の発信

◎ 継続的な学校訪問

指導主事等が年間を通じてモデル校を訪問し、教員の指導力向上やICTの効果的な活用による指導方法の開発等について、伴走型の支援を行いました。



◎ 授業づくり

指導主事等が指導案検討会に参加するなど、モデル校の先生方と二人三脚で授業づくりに取り組みました。



◎ 授業研究協議会の開催

モデル校による提示授業を基にした授業研究協議会を開催し、研究の成果を発信するとともに、ICT活用を含む授業改善について、参加者同士で協議を行いました。

◎ 検証改善委員会

有識者から、県の教育施策やモデル校の取組に対し「秋田の探究型授業」の充実に向けた授業改善の視点で、検証していただきました。



◎ オンライン・ミーティング

令和8年1月9日（金）に、事業の成果等を県内外に発信する「オンライン・ミーティング」を実施しました。

「授業力のキーワード」の活用

義務教育課では、授業改善の視点として10項目の「授業力のキーワード」を提案しています。詳しい活用方法は、Ⅱ章「『授業力のキーワード』を活用した『秋田の探究型授業』の充実」や、Ⅳ章「全校体制での研究推進に向けた取組」で紹介しています。

「授業力の
キーワード」
一覧は
こちら



①授業を楽しむ

教師自身が授業を楽しんでいる。



⑥見取る力

児童生徒や学級の状態を、表情やつぶやき、ノートやタブレット等への記述内容から見取っている。



②必要感

児童生徒が必要感をもって「解決したい」と思えるように、導入の手立てを工夫している。



⑦児童生徒が主役

児童生徒が自分で解決方法を見いだしたり、助け合ったりしながら学習を進めることができるように、教師の指示や発話の量を調整している。



③ねらいの明確化

本時で何ができるようになるばよいかを明確にしている。



⑧コーディネート

分かっている・できている児童生徒が活躍するだけでなく、困っている児童生徒の考え等も生かしながら、「分かった」、「できた」につなげている。



④学習習慣

発表の仕方、話の聞き方等の学習習慣が身に付くように働き掛けている。



⑨言葉掛け

授業の様々な場面で、児童生徒の発言や、頑張ろうとする姿、挑戦する態度等を受容的に取り上げ、認める言葉掛けを行っている。



⑤ICTの活用

授業の様々な場面で、ICT等効率的で伝わりやすい方法を児童生徒が選択して活用できるようにしている。



⑩振り返り

本時の学びや自身の変容を自覚できるように、振り返りの時間を確保している。

令和7年度モデル校



北管内
八峰町立八峰中学校



中央管内
由利本荘市立鳥海小学校



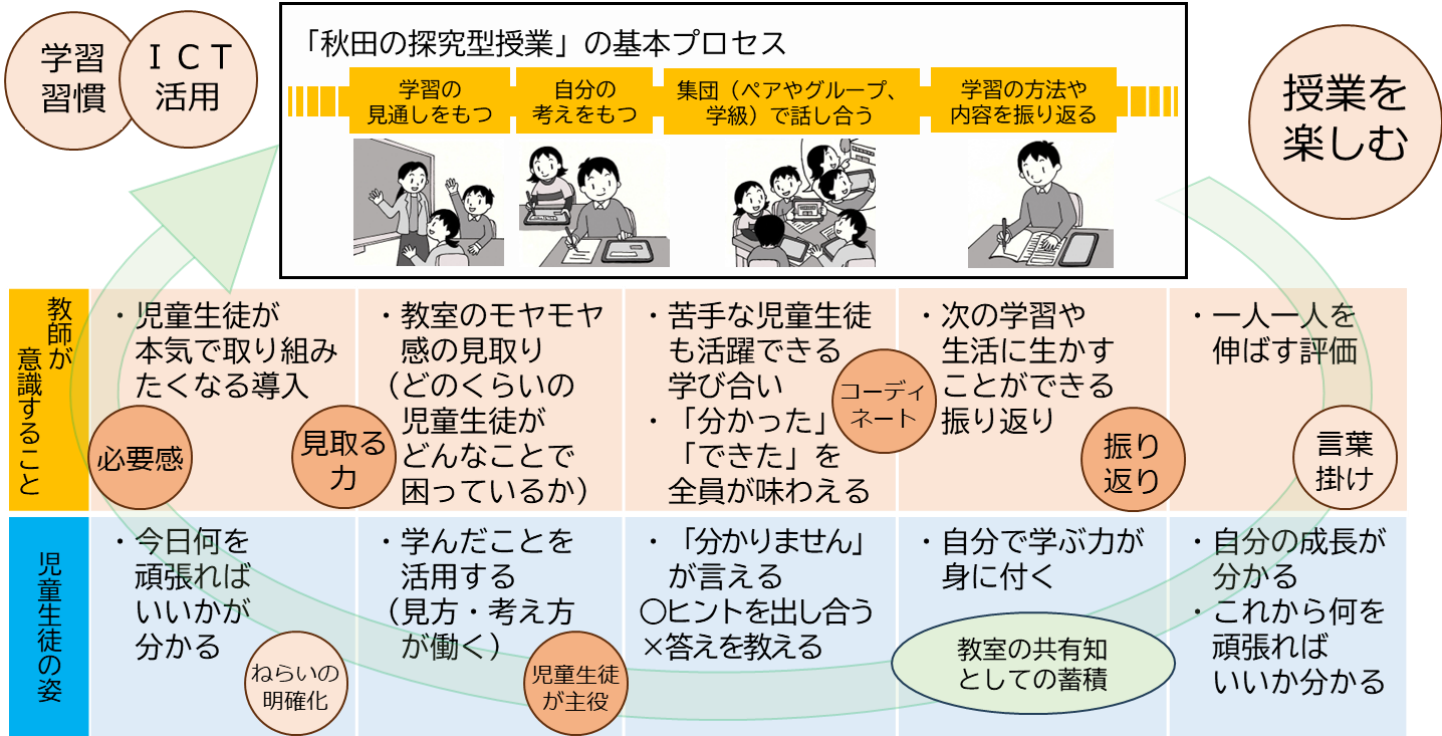
南管内
美郷町立仙南小学校

II

「授業力のキーワード」を活用した「秋田の探究型授業」の充実

「秋田の探究型授業」の充実を図るためには、児童生徒が各教科等の「見方・考え方」を働かされるようにするとともに、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図りながら、学習過程におけるそれぞれの段階を効果的に機能させ、一連のプロセスとして関連付けることが大切です。

「授業力のキーワード」を「秋田の探究型授業」の基本プロセスに位置付けた授業改善のアイデアについて、5つのキーワードを基に紹介します。



②必要感 児童生徒が本気で取り組みたくなる導入

児童生徒が自ら問題発見し、「解決したい」「考えてみたい」という意欲をもって学ぶことができるように、題材との出会い方や発問を吟味することが大切です。

問題発見につながる4つの視点

- 1 既有経験や既習との「ズレ」
- 2 友達との意見の対立・拮抗
- 3 目的達成へ向けての障害克服
- 4 素朴な疑問から問題意識への醸成

鳴門教育大学大学院 特命教授 藤村 裕一 氏による



極端な場面を紹介し、素朴な疑問を引き出す

(八峰中・数学)



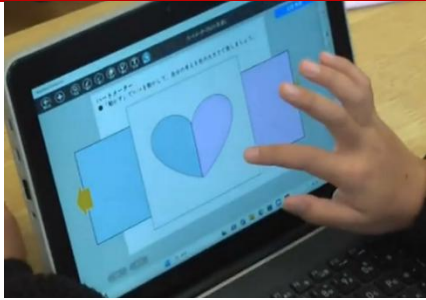
「給食のメニューをつくる」という目的でデータを活用

(鳥海小・算数)

⑥見取る力 教室のモヤモヤ感の見取り

「難しいと思っている子は何人くらいいる?」「簡単ですぐにできてしまっている子は?」「どんなことで困っている子が多い?」「どんなことに疑問を感じている?」など、児童生徒の思考の状況を見取り、学び合いで取り上げる内容を焦点化することが大切です。

児童生徒の思考を見取る工夫



ハートメーターで自分の考えの度合いを可視化
(鳥海小・道徳)



思考ツール(ピラミッドチャート)で考えを明確化
(仙南小・社会)

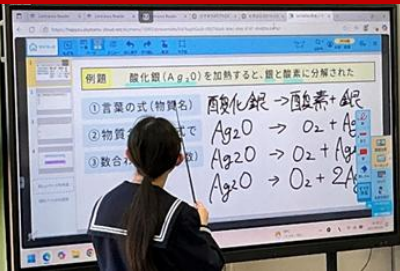


生徒が選択した考え方を一覧表示で共有
(八峰中・国語)

⑧コーディネート 苦手な児童生徒も活躍できる学び合い

「分かった」を全員が実感するには、児童生徒の困り感に寄り添い、学び合いを通して解決できるようにすることが大切です。また、学び合いでヒントを出し合ってからもう一度個で解決する時間を設定するなど、「できた」の瞬間を全員が味わえるようにすることも大切です。

コーディネートの工夫



困っている生徒が多いときは、自力解決の途中でもう一度見通しを共有
(八峰中・理科)



できた児童が答えを発表するのではなく、ヒントとなる発言を促す
(鳥海小・算数)



本当に理解できたか明確にするため、ペアで説明し合う時間を設定
(仙南小・算数)

⑦児童生徒が主役 ⑩振り返り 次の学習や生活に生かすことができる振り返り(教室の共有知としての蓄積)

児童生徒が自分で解決方法を見いだしたり、助け合ったりしながら学習を進める、児童生徒が主役の学びを実現するには、学習を通して分かったことや、働かせた見方・考え方を振り返り等の場面で価値付け、次の学習で活用できるように蓄積することが大切です。

「学びの宝箱」の取組



既習の内容や、学習を通して働かせた見方・考え方を、「学びの宝箱」として、教室掲示やクラウドに蓄積し、児童が自ら選択して次の学習に生かすことができるようにする
(仙南小・各教科)

Ⅲ

モデル校でのICT活用例

発達の段階に応じたICTの活用

児童生徒が効果的にICTを活用するためには、情報を入力するための基本的な操作技能や情報を収集するためのスキル、さらには情報を適切に扱うためのモラル等が身に付いていることが大切です。

小学校低学年の段階から、視力等の健康面に配慮しながら、ICTを身近な学習ツールとして、操作を体験したり楽しさを味わったりできるようにすることがスキルやモラルの定着につながります。

低学年での活用



アサガオの観察をした後に写真を貼り付け、気が付いたことを手書きで入力することで、観察記録として蓄積することができます。

(鳥海小・1年生活)



教室の中で見付けた形を写真に撮影し、電子黒板に表示することで、学び合いで効率的に考えを共有することができます。

(仙南小・2年算数)



家庭学習での音読を、録音機能を使って音声データとして蓄積することで、児童が自身の音読の成長を客観的に振り返ることができます。

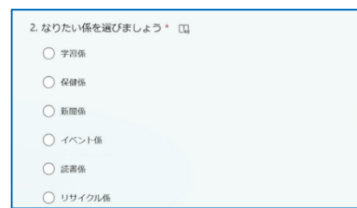
(鳥海小・2年国語)

中学年での活用



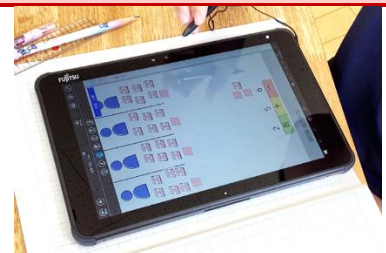
植物の成長記録を蓄積する場面等、短い文章からキーボード入力を活用することで、次第にキーボード入りに習熟することにつながります。

(鳥海小・3年理科)



学級の係を決める話合いの際にアンケート機能を使うことで、なりたい係の集計を瞬時に行うことができます。

(仙南小・4年特活)



割り算の学習で、具体物の代わりにICTを活用することで、大量の折り紙を動かして考えることができます。

(仙南小・4年算数)

高学年での活用



教科書やインターネットで収集した情報を思考ツール(クラゲチャート)にまとめることで、分かりやすく分類することができます。

(鳥海小・5年社会)



共同編集機能を活用してレポートづくりを行うことで、他者の進み具合や全体像を意識することができます。

(仙南小・5年社会)

「由利本荘市 第4回学ぶんタイピング競技会」の結果

12月16日から1月20日の期間に実施した「由利本荘市 第4回学ぶんタイピング競技会」には、小学生457名、中学生79名、計536名の児童生徒が参加しました。第3回と同様、学年ごとに10位まで入賞しましたので、結果をお知らせします。上位入賞おめでとうございます。

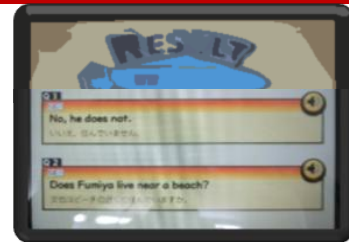
小学4年生		小学5年生		小学6年生	
イニシャル	得点	イニシャル	得点	イニシャル	得点
第1位 OS	48170	KH	55070	KR	68886
第2位 IH	44937	OY	54475	SY	67868
第3位 SU	42384	OY	51183	IT	64541
第4位 IA	41311	KA	49935	SK	62566
第5位 SR	38908	SN	47378	SR	58674
第6位 TK	38261	SR	47157	SM	55050
第7位 IK	37192	TM	46958	SV	55029
第8位 TR	35819	MH	45699	KH	52905
第9位 SS	35234	SA	45319	SM	52589
第10位 SS	32266	SJ	44992	OY	51036

由利本荘市教育委員会では「タイピング競技会」を開催し、児童生徒のタイピング技能向上をサポートしています。

個に応じたA I の活用

英会話の練習においてA Iを活用することで、自分の発話量や正確性を把握したり、生徒一人一人の習熟度に合わせ、自分のペースで英会話を練習したりすることが可能になります。J T EやA L Tによる指導や支援を補い、発話量や復習の機会を増やすことにもつながります。

A I 音声認識アプリの活用



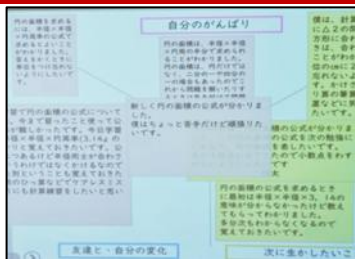
(左)A Iアプリの発音にならって発話。「イントネーション」「発音」「流暢」の3観点で評価が返されます。
(右)A Iの評価を基に、苦手と判断される部分について、復習できるようになっています。

(八峰中・英語)

著作権に配慮し一部画像を加工しています。

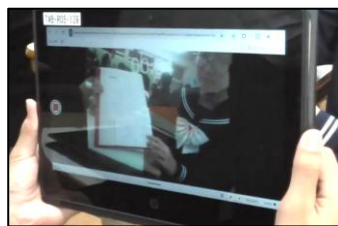
学習成果の蓄積

I C Tで学習の記録を蓄積することは、自身の変容を客観的に捉え、成長を実感するために効果的です。また、過去の思考過程や習得した知識をいつでも参照できる環境は、児童生徒が自らの学びを調整する態度の育成につながります。



振り返りを蓄積し、学習のつながりを実感する。

(鳥海小・算数)



自分の説明を録画し、自己評価や、変容の確認につなげる。

(八峰中・数学)

コラム

「見方・考え方」を働かせ思考を拡張するI C T活用

秋田大学教育文化学部 講師 加藤 慎一 氏

教科書だけで学ぶ授業では、一つの固定された図を見ながらの学習になっていないでしょうか。

算数・数学では、I C Tを活用すると、例えば平行四辺形の「2組の対辺が平行である」という性質を保ったまま、様々に変形させることができます。その中で共通して言える性質について考えてみる。例えば、角の大きさは変わるけれど対角の大きさが等しい関係は変わらないこと。このような「変わらない関係」に目をつけて考察していくことは、図形領域の学習で特に大事な見方・考え方の一つです。



端末上で操作した図形

(鳥海小・算数)

秋田大学教育文化学部 講師 原田 勇希 氏

今、I C T活用は、文房具として当たり前を使うという段階を越えて、自らの思考を拡張するツールとして使っていくというステップにあると思います。

理科では、例えば、月の満ち欠けの学習は、「時間的・空間的な見方」を働かせるものです。模型を使った天体の位置のシミュレーションはよく行われていますが、I C Tを活用することで、「このモデルが正しいなら明日の月はこう見えるはずだ」「来週はこうなるはずだ」と予測することができます。予測をした上で、実際に自然の事物現象を観察し、整合させて判定することは、まさに思考を拡張する理科ならではの使い方といえます。

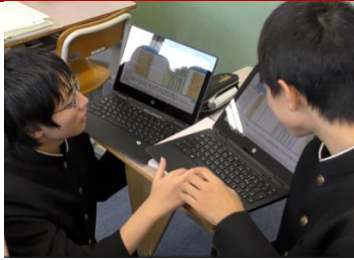
IV

全校体制での研究推進に向けた取組

児童生徒がよりよい学びを意識できる取組

一人一人に応じた探究的な学びを実現させるためには、学習の当事者である児童生徒が、自らの学びに責任をもつことが大切です。モデル校では、児童生徒が自ら学習のツールや交流する相手を選んだり、児童生徒同士が授業を参観したりして、よりよい学びを意識できるようにする取組が見られました。

学び方を選択できる授業



八峰中では、一覧表示された一人一人の考えを基に、意見交流したい相手を自分たちで決めながら、ペアや、3人、4人等のグループで意見交流していました。

学習方法を自ら選択・決定することは、学習の当事者意識を高めることにつながります。

「子ども学習参観」の取組



メモを取りながら参観（仙南小）

意見をだしたら褒めてたから



グループで話し合いをうまくやっているからこの写真を撮りました。

話し合いでうまくいかなかったことを話しているのが新鮮だったから。

よいと思った理由を共有（鳥海小）

上級生の授業の様子を下級生が参観する取組です。

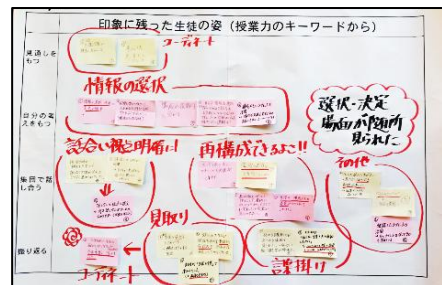
仙南小では、参観の視点を基に、メモを取りながら参観していました。鳥海小では、児童自身がよいと思ったところを写真に撮り、タブレットの付箋機能で理由を書き込んでいました。

「よい学び」を児童生徒が共有することは、学習を客観的に振り返り、自らの授業への取り組み方を改善することにつながります。

授業改善の視点をそろえる取組 ～「授業力のキーワード」の活用～

全校体制での研究を充実させるためには、学校の教育目標を踏まえつつ、「どのような授業を実現するか」という授業改善の視点を全教員で共有することが重要です。例えば、年度当初の職員研修会等で「授業力のキーワード」に基づいて協議することは、目指す授業像をより具体的にイメージすることにつながります。

また、中学校では教科担任制となりますが、例えば、国語科の教員が数学科の授業を参観した後、教科に関する専門的な内容について協議するのは難しくても、「必要感」や「コーディネート」といったキーワードを共通の視点とすることで、円滑な議論が可能になります。



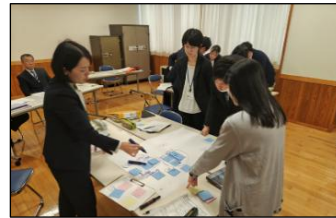
「授業力のキーワード」を活用した授業研究協議会（上：仙南小 下：八峰中）

ショートスピンの自己評価を基にした研究のPDCAサイクル

モデル校では、ショートスピンの自己評価を生かした取組を取り入れていました。

校内で授業参観の機会があるごとに、「自分の授業にどう生かすか」をアンケート機能で蓄積したり、年間を数期に分けて、ショートスピンで自身の取組を振り返ったりすることで、全教員が研究を自分事として捉え、授業改善に係る自身の変容を意識できる、PDCAサイクルを機能させた取組が見られました。

学んだこと、今後実践したいこと。
 子どもが考えなくなる課題設定。
 習熟までしっかり行うことができる授業計画。
 時間短縮のために、見通しやねらいを焦点化する。
 早くできた児童への配慮や、発表のコーディネート
 を効果的に行えるようにしたい。
 見通しのもたせ方が丁寧すぎると子どもたちの「解決したい」という意欲をそぐこともある。
 思考したことが分かる手立てを講じる。



授業の自己評価を蓄積

(仙南小)

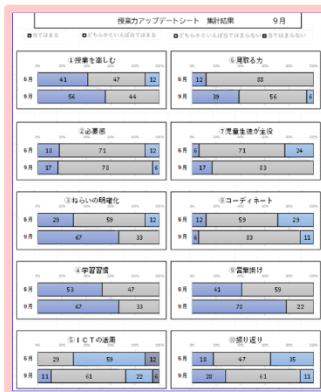
ショートスピンで研究の進捗を検証

(鳥海小)

「授業力アップデートシート」の活用

「授業力のキーワード」を活用し、各学校における授業改善に資する、PDCAサイクルの構築を支援するツールを紹介します。

教員が Microsoft Forms で回答し、結果を研究主任等が Excel ファイルに入力することで、「授業力のキーワード」に基づく授業の変容を確認できます。



「授業力アップデートシート」

ダウンロードと使用方法の詳細はこちら



コラム 主体性や責任感を育む学校づくりを

秋田大学大学院教育学研究科 教授 成田 雅樹 氏

これからの世界が共有する児童生徒像として「エージェンシー」という言葉が一つのキーワードになっています。この言葉には様々な説明がありますが、個人的な解釈としては、「みんな」を意識した「当事者意識」というところに特徴があると思います。

子どもたちのエージェンシーを育むために、どのような教育を実現したらよいか。

一つは「真正性」。子どもが本当に解決したいと思って学ぶこと。

次に「相互関連性」。それぞれの教科の学びが孤立するのではなく、教科横断的に関係しているものとして児童生徒の頭の中で体系化される必要があること。

それから「柔軟性」。児童生徒のニーズ・実態に応じて、学習内容や活動を柔軟に実施していくこと。

そして「関与」。児童生徒が授業づくりにどの程度関与しているのか。

モデル校の取組からは、今挙げた4つのことに関連した、エージェンシーを育むヒントがたくさん得られると思います。

秋田大学教育文化学部 教授 佐々木 雅子 氏

全国学力・学習状況調査の質問調査から、本県の児童生徒は「社会や地域をよくする」という意識の数値が高いのですが、実際に学校の中にいる児童生徒は、まだまだ「教えてもらう」「何かを受ける」という、なんとなく待っている姿勢が強いと感じています。

これからの授業改善には、「ICT活用」、「授業力向上」にプラスして「学習者をどう育てるか」という視点も入れていくと、より良く展開していくのではないかと思います。その時のキーワードとしては「責任」だと思います。学習者一人一人が、自分の学びに責任をもつ。

先生が教えてくれるかどうかではなく、自分次第で変わっていくのだということが実感できるような授業改善が進むことを期待しています。



地域の文化を調べた新聞
(鳥海小・総合的な学習)



検証改善委員からの提言①

関数の考えを視点とした算数・数学の授業改善

- モデル校での取り組み、全国学力・学習状況調査、秋田県学習状況調査を踏まえて -

秋田大学教育文化学部 講師 加藤 慎一 氏

1. モデル校での取組における成果と今後の展望

モデル校で、小学校第5学年算数の授業を参観した。多角形の頂点の数を変えると、内角の大きさの和はどのように変わるかについて考察する授業で、児童は、五角形と六角形の内角の大きさの和がいくつになるか探っていた。三角形や四角形と同様に、五角形と六角形を切って角を集めることによって、それぞれの内角の大きさの和を求めることができないか、既知である三角形や四角形の内角の大きさの和を基にして、未知である五角形と六角形の内角の大きさの和を求めることができないかなど、児童の取組は様々であった。

問題解決過程において、児童が、ある頂点を基準としたときに、基準とした頂点とどの頂点とを線分で結び対角線をひくかによって、三角形や四角形の個数が変わることについて検討する活動を促進するために、解決の手段の1つとして、デジタルコンテンツを活用できるようにしていた。児童は、デジタルコンテンツを活用して五角形と六角形の場合でどのようなことがいえそうか試行錯誤したり、他の多角形では似たことがいえそうか検討しようとしたりする様相が見いだされた。

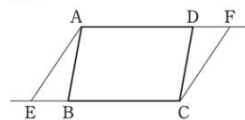
今後は、定数として捉えていた、五角形と六角形の頂点の位置を変数として見直し、それぞれの図形の頂点の位置を変えることによって、それぞれの図形の一つ一つの角の大きさやそれぞれの図形の内角の大きさの和はどのように変わるか、あるいは変わらないかについて検討する活動を設計することによって、統合的・発展的に考える態度の育成につながることが期待される。

2. 全国学力・学習状況調査にみる課題

中学校数学[9(2)]の問題では、2点E、Fの位置を、辺上から辺の延長上に変えても、四角形が平行四辺形になることについて、元の証明を読んで改善できるかが求められている。

(2) 次の図2のように、平行四辺形ABCDの辺CB、ADを延長した直線上に、 $BE = DF$ となる点E、Fをそれぞれとつても、四角形AECFは平行四辺形になります。このことは、前ページの証明1の一部を書き直すことで証明できます。書き直すことが必要な部分を、下のアからオまでの中から1つ選び、正しく書き直しなさい。

図2



ア

平行四辺形の向かい合う辺は平行だから、
 $AD \parallel BC$
よって、 $AF \parallel EC$ ……①

イ

平行四辺形の向かい合う辺は等しいから、
 $AD = BC$ ……②

ウ

仮定より、
 $DF = BE$ ……③

エ

②、③より、
 $AD - DF = BC - BE$ ……④

オ

④より、
 $AF = EC$ ……⑤

①、⑤より、
1組の向かい合う辺が平行でその長さが等しいから、
四角形AECFは平行四辺形である。

中学校数学[9(2)]の問題

このとき、2点E、Fを静的に捉えている生徒は、2点E、Fが辺上にある場合と、辺の延長上にある場合を、それぞれ異なるものとして考察しているため、統合的・発展的に考えることに困難が生じることが想定される。

一方で、2点E、Fを動的に捉えている生徒は、2点E、Fの位置が変わるとき、

変わっているものは何か、2点E、Fの位置が変わっても、変わらないものは何かについて考察し、統合的・発展的に考えられるだろう。このように、全国学力・学習状況調査の結果から、定数として捉えていた図形の構成要素を変数として見直し、統合的・発展的に考えることに課題があることが見いだされる。

3. 秋田県学習状況調査にみる課題

小学校第5学年12の問題と中学校第1学年4(2)の問題では、長方形の縦の長さ Δ と横の長さ \circ の関数関係を式で表すことが求められている。

12 次の図のように、長さが18cmのはり金を使って、周りの長さが18cmの長方形をいろいろつくります。

まさきさんは、長方形のたての長さを、1cm、2cm、3cm、…と1cmずつ長くしたときの横の長さを調べ、たての長さ Δ と横の長さ \circ の関係を表にまとめました。

たての長さ Δ (cm)	1	2	3	4
横の長さ \circ (cm)	8	7	6	5

たての長さ Δ と横の長さ \circ には、どのような関係がありますか。たての長さを Δ cm、横の長さを \circ cmとして、 Δ と \circ の関係を表す式を の中に入力してください。

式

(14)

小学校第5学年12の問題

(2) 次の図のように、長さが20cmの針金を使って、周りの長さが20cmの長方形をいろいろつくります。ゆいさんは、このときの長方形の縦の長さ x と横の長さ A について気づいたことを下のよう

に説明しました。[ゆいさんの説明]が正しくなるように、Aにあてはまる長さを、 x を使った式で表さない。

[ゆいさんの説明]
長方形の縦の長さを x cmとすると、この長方形の横の長さは(A)cmと表すことができます。

(11)

中学校第1学年4(2)の問題

このとき、小学校第5学年12の問題において、縦の長さの値が1増えると、横の長さの値は1減ると捉える児童は、「 $\Delta + \circ = 9$ 」の式に表すことに困難が生じることが想定される。

一方で、縦の長さの値と横の長さの値の和はいつでも9になる、と捉える児童は、「 $\Delta + \circ = 9$ 」の式に表すことができるだろう。

このことは、中学校第1学年4(2)の問題においても似たようなことがいえる。

このように、秋田県学習状況調査の結果から、2つの数量の関数関係を式に表すために、縦の長さが変わっても、変わらないものは何かを捉えることに課題があることが見いだされる。

4. 関数の考えを視点とした授業改善

算数・数学の授業過程に関数の考えを重視するねらいの1つは、「変化と関係」領域や「関数」領域に限らず、さまざまな領域の学習内容について理解を深めたり、統合的・発展的に考えたりできるようにすることである(中島、1981)。

モデル校での成果と課題、全国学力・学習状況調査および秋田県学習状況調査の課題を踏まえると、中島(1981)の指摘にあるように、算数・数学の授業過程において、定数として捉えていた事柄を、変数として見直したり、ある事柄を変えるとき、それにもなって変わる事柄は何か、ある事柄を変えても、変わらない事柄は何かについて考察したりするなど、数量や図形等を動的に捉える活動の充実を図ることができるようになることが必要かつ重要である。

提言のまとめ

- 定数として捉えていた事柄を、変数として見直す活動を重視すること。
- ある事柄を変えるとき、それにもなって変わる事柄は何か、ある事柄を変えても、変わらない事柄は何かについて考察する活動を重視すること。

調査結果から見る「理科」の現在地と行き先

－全国学力・学習状況調査に基づいて－

秋田大学教育文化学部 講師 原田 勇希 氏

1. ICTを活用した授業力向上事業状況

今年度、本事業のモデル校の取組からは、優れた工夫が数多く見られたが、紙幅の関係上ICT活用と授業研究に絞って簡潔に報告する。

(1) ICTによる「見方・考え方」履歴の蓄積

モデル校ではICTを活用し、「学びの宝箱」を通して児童が自らの学びを振り返りやすいような工夫がなされていた。特に重要な点は、これまでの学習で働かせてきた「見方・考え方」の履歴が蓄積されていたことである。新たな問題の解決のために自ら「見方・考え方」を振り返りながら学習に向かう児童の姿は、まさに自律的・探究的な学びを体現するものであった。

(2) 校内研究による授業力の継承と実践知の共有

モデル校では「1人1授業」を行う校内研究が実施されている。授業公開を通じた教員同士の学び合いは、机上論でなく具体的な方法論を共有できるため負担は大きいものの大変優れた研修方法である。先生方のご尽力には大変頭が下がる思いであるとともに、こうした取組が県内の各学校へ広がっていくことを願っている。

2. 令和7年度全国学力・学習状況調査より

小学校の[3(4)]の問題では、科学的探究の最初期に該当する「問題」の発見に焦点が当てられている。従来型のテストや各種学校の入学試験問題では、既習事項を直接的に問う問題や、既習事項を基にした思考力を問う問題が多いため、このような問題に驚いた先生や児童もいたかもしれない。

この問題の重要な点は、小学校段階では「発芽の条件は水、空気、適した温度」と学習することが多いのに対し、レタスは光

たかひろさんたちは、レタスの種子を発芽させようとしています。

たかひろさんが行った実験

(4) てるみさんは、調べてみたいことをもとに、新たな【問題】を見つけました。てるみさんは、どのような【問題】を見つけたと考えられますか。その【問題】を1つ書きましょう。

小学校[3(4)]の問題

発芽種子であるため、上記条件に加えて発芽には「光」（正確には赤色光）が必要なことである。つまり既習事項に固執し、調査を「知識を再生する場」と認識する児童ほど、この事例から新たな「問題」を発見し、他の発芽条件の可能性を考えることが難しくなる。さて、この問題の全国正答率は29.9%であったのに対し、秋田県の正答率は47.9%であり、全国平均を大きく上回っている。現実的な探究の過程を模した問題に対応する力をいわゆる試験対策で身に付けることは容易でなく、日々の探究型学習を通してようやく培われるものであろう。したがって、この結果は秋田の探究型授業の成果であると思われる。

中学校も全国平均を超える成果であったが、優越性はそれほど大きくない（偏差値換算で1.3ポイント程度）。学校教育の目標は学力競争ではないため、他県や全国平

⑧ 博物館で学芸員より説明を受け、大地の変化について探究しています。（中略）

(2) 下線部の考えが正しいと言うためには、ボーリング地点③のボーリングの結果がどのようになればよいか。■を必要な数だけ適切な位置に移動させ、最も適切なボーリング地点③の結果を示さない。

中学校[8(2)]の問題

均とのスコア比較自体に大きな意味はない。しかし、強みや改善点を把握するための材料にはなるため、以下では全国平均を下回った問題を事例に対応策を考えてみたい。

中学校の[8(2)]の問題はボーリング調査を基に、地下に広がる地層の様子を推論する問題である。この問題の全国正答率は18.1%であるのに対し、秋田県の正答率は15.9%であり、やや下回っている。この内容を実験や観察を通して学ぶことは容易でないが、秋田大学教育文化学部附属中学校の令和4年度秋季公開研究協議会で公開された授業実践が大いに参考になる。教材はタッパーの中に着色した寒天を層状に流し込むことによって地層を作ったものであり、生徒は透明なストローを使用してボーリング調査を行う。タッパーの外周を黒紙で覆うことにより、ボーリング調査時に地層はブラックボックスとなるが、紙を外せば観察可能であるため、答え合わせができる。

さて、それではこのような教材を使用して空間的な見方を働かせる授業を行えば、この問題に対応できるようになるだろうか。おそらくそれだけでは十分でない。中学校理科のように学習内容の抽象度が高まる時期に探究型授業を通して確かな資質・能力を育むためには、「帰納」と「演繹」という異なる2つの推論をバランスよく探究の文脈に位置付けることが重要である。例えば、前述の寒天による地層モデルから探索的に多くのデータを取り、「東西方向の地層の傾きを知るためには、南北方向の位置関係が揃った最低2点からのサンプルが必要」とあるという一般則を導くのは「帰納」による推論である（あくまで中学校理科の範囲に限る）。その一般則を未知のブラッ

クボックス化された地層モデルに適用して問題を解決する過程には「演繹」が含まれる。観察や実験の結果から一般則を導く、「帰納」による推論だけで探究型授業を完結させるのではなく、その一般則を活用した具体的な複数の問題を解決する過程も探究の中に位置付けていくことが重要である。

3. 秋田県学習状況調査より

令和7年度秋田県学習状況調査でも科学的探究の文脈を重視した問題が多数出題された。概して良好な結果であると考えるが、中学校第1学年の「顕微鏡の操作手順」の正答率が28.1%と、オーソドックスな技能を問う問題でありながら低い水準であったことは注目に値する。現実として、顕微鏡もガスバーナーも定められた手順から多少逸脱しても事故が起こる確率はそれほど高くないし、観察や実験ができてしまうことが多い。観察・実験を生徒に委ね、教師が口を出す機会を減らして主体的な学習を重視しようとするほど、生徒は「主体的に」誤った操作手順に行き着いてしまう可能性がある。授業では推奨手順の理由を考えさせながら、また定期的に手順とその理由を復習する機会を設けることが重要であろう。

4. 指導上の留意点

秋田の探究型授業による成果は令和7年の現在でも健在であるのだが、特に中学校では、学習した一般則や知識をもとにした「演繹」による課題解決を行う探究過程を授業に取り入れていきたい。

「帰納」と「演繹」の両輪を重視した探究型授業の蓄積がなされることを願っている。

提言のまとめ

- 探究の過程では、観察・実験を通して一般則や知識を導く帰納的推論だけでなく、学習した一般則や知識をもとに具体的な問題の解決を図る演繹的推論を取り入れること。
- 顕微鏡の取り扱いなどの基本的な技能については、なぜその操作手順であるのかを考えさせるとともに、普段の学習の際にも定期的に復習する機会を設けること。

「エージェント-agency」を身に付ける

－ 冒険 adventure のある授業を－

秋田大学教育文化学部 教授 佐々木 雅子 氏

1. モデル校の取組

英語授業・学習における生成AIの活用の模索が令和7年度から学校教育現場で本格的に開始された。このような空前の大変動を背景に、今年度の「ICTを活用した授業力向上事業」のモデル校3校の取組は、ICTを味方につける方法を具体化し、教師の授業力と共に児童生徒の学びの主体性を大きく伸ばした。

今後さらに、ICT活用が効果的に機能する質の高い学習指導を充実させるには、10の「授業力のキーワード」の中の「授業を楽しむ」が鍵であると思う。児童生徒も教師も「楽しい」と思える授業はどんな授業だろう？「冒険 adventure」とその質を同じくすると考える。ある問題に遭遇し、解決方法を考え工夫し、試行錯誤や紆余曲折を経た後に辿り着く発見。人はこのプロセスを「楽しい」と感じるのではないだろうか。他の9つのキーワードは「授業を楽しむするための下支えする力」かもしれない。「楽しい」は、人を無理なく動かす。浅薄でない真の楽しさを、授業力とICTで生み出していくことで、自然に学びはその質が高くなっていくものと推測する。

また、秋田県の場合、自分の学びに「責任」をもつことを意識させる、すなわち、児童生徒に「学習者エージェント-learner agency」を身に付けさせることが必要であるとを感じる。具体的なイメージは、素直という美德を超え、主体的に自分の学習に責任をもち、受け身ではなく、自ら問題解決の道を進んでいく学習者である。教師が後方支援すれば、自信をもつ児童生徒が育つ。そういった指導力が教師に求められている。後方支援に回るためには、事前の教材研究力、事中の観察力と介入の力量、事後の省察力の向上が欠かせない。児童生徒も教師も、問題解決を楽しみ、自信を得られれば、

自然と自律的・意欲的に学びを進め成果を出せると信じる。

2. 令和7年度 秋田県学習状況調査

(1) 特徴的な問題

18問すべて「実地的なコミュニケーション」の場が想定されている良問である。問題形式からの分類と各該当設問番号は、下のとおりである（「選択式」の該当設問は他すべて）。

	選択式	短答式	記述式
中1 (該当設問)	12	3 (13、14、15)	3 (5、16、18)
中2 (該当設問)	14	2 (17、18)	2 (15、16)

問題形式からの分類

「短答式」と「記述式」を区別する特徴は、「短答式」が既に内容が与えられている「言語操作（知識・技能）」問題に対し、「記述式」は自分の情報や考えをことばにのせる「言語創出（思考・判断・表現）」問題である。さらに、「記述式」は一見、思考・判断・表現問題として一括りにできるように見えるが、2種類に区別される。ひとつは指示（Who's your favorite character? / 自分の将来の夢についての紹介文）に従い自分の考えを表現する「自己表現」問題（青色ハイライト）であり、もうひとつは読解内容を基に相手に合わせ、相手のためになる質問や情報を独自に考え出し表現する「相手志向」問題（黄色ハイライト）である。

(2) 調査結果の概要

設定通過率を超えた問題数は、全18問中、中1で10問（昨年度8問）、中2で7問（昨年度3問）。平均通過率は、中1で65.6%、中2で62.1%という結果であり、中1の1問（設問13 22.0% She reads）以外は30%以上の通過率を示している。

技能別、問題形式別の平均通過率は下のとおりであった。「書く」力の低さが、今年度調査でも目立った。中1の記述式以外は、「短答式」「記述式」通過率は40%以下、「選択式」よりもかなり低い。

	聞く	読む	書く
中1	81.6	72.6	38.4
中2	66.9	70.0	39.1

技能別平均通過率[%]

	選択式	短答式	記述式
中1	78.2	33.1	47.6
中2	68.6	40.0	38.2

問題形式別平均通過率[%]

(3) 課題の改善に向けて

①協働的学びを活用した知識・技能の習熟

「書く」力が未熟であることが再認識された。令和5年度全国学力・学習状況調査結果への提言で述べたように、「書く」発信力は「なんとなく」以上の「徹底的」レベルでの知識・技能が問われる（参照：[令和5年度全国学力・学習状況調査秋田県調査結果の概要](#)）。

英語使用の中心は意味にある。しかし、英語学習は意味伝達・交渉に加え言語形式の習熟が欠かせない。コミュニケーションが成立すれば良しとして授業を終えずに、学習者が発した英文を適切かつ正確な英語に仕上げる「活動」を授業内に習慣的に据えてはどうか。例えば、時間は3分、協働的学びとしての活動を確保する。具体的には、学習者同士がペア/グループでの対話により完璧な英語に仕上げる活動である。教師は、「詰めの甘さが出ないよう協力し合って」と声掛けして協力する意義と楽しさを自覚させ、最終的にチェックする。学習者同士の対話では解決がつかなかった場合でも、教師の最終的判断が解決してくれ

る。AIを活用してもよいが、大事なことは「言語についてのコミュニケーション」により吟味し、その過程で正確性を「身に付ける」ことだ。

②「相手志向」のコミュニケーション力の育成

同じ記述式の「書く」問題でも、放課後の過ごし方、好きなキャラクター、将来の夢について書くことは、自分の中に情報が揃っているので言語化するだけでよい。小学校でも行ったことのある馴染みのある活動である。一方、中1の設問18（純のスピーチへの質問）と中2の設問15（母親が来日するJimの相談に答える）は、負荷の高い問題である。純やJimのメッセージや状況を理解・把握し、「相手志向のコミュニケーション力」を発揮する必要がある。英語という言語だけの問題ではなく、状況の解釈、関連付け、発想力も伴う総合力が問われている。教師は「異文化間コミュニケーション能力 Intercultural Communicative Competence」という概念を念頭に、4技能統合型授業を効果的に実施する力を磨く必要がある。

(4) 指導上の留意点

質問紙調査の「外国語の勉強は好きか」の問いに対し、「好き/どちらかと言えば好き」と回答した割合は、小4（78.1%）から中2（61.8%）にかけて徐々に下がり、中1から中2にかけての下がり幅が最も大きい。また、中2では令和5年度と比較して約5%も下降。好きな理由は「将来、社会に出たときに役立つ（28.2%）」が4分の1強であり、好きでない理由は「不得意（23.1%）」が最多数。温かい楽しさが感じられ、不得意感を融かす「冒険と発見」のある授業により、この傾向は変化し得る。

令和8年4月下旬にはCBT(Computer Based Testing)で全国学力・学習状況調査が実施される。授業力向上が秋田県英語教育の新たな飛躍をもたらすことを期待する。

提言のまとめ

- 自分の学びに「責任」をもつ：「学習者エージェンシー learner agency」を身に付ける。
- 協働的学びで正確性を育てていく：正確に仕上げる「活動」を授業内に習慣的に据える。
- 相手志向の英語コミュニケーション能力：「言語能力+異文化間能力」を同時に育てる。
- 冒険と発見のある楽しめる授業：授業そのものに魅力を感じてもらい、不得意感を融かす。

どう理解しているかを表したグラフで、30代～60代が「小雨が降ったりやんだりしている様子」と捉えていることがわかるものである。

納得した点として取り上げやすいのは、目に触れる①②③の順だと考えられる。資料2と3は①を裏付ける事例である。また②の理由としてあげることもできる。さらに、児童が解答するために読む【話し合いの様子】には、資料2と3に言葉が変化していることが書かれていると述べられている。これは①のヒントになる。また【話し合いの様子】には、資料2と3の言葉の変化は、資料1に書かれている「言葉の正誤を軽々しく決めることはできない」とつながっていると述べられており、資料1と資料2または3との組み合わせ方を示唆している。

一方③は、資料4の「世代による意味理解の食い違いがあること」を理由とする必要がある。これは資料1の「コミュニケー

ションの食い違い」の実例ではあるが、「放置しておくわけにもいきません」という意見までを含められるのか迷う点である。資料1の前半の大部分が、こうした言葉の変化＝人による食い違い、を肯定していることも判断を難しくしている。

正答率が低かった問題(1)は、資料1の③が資料4と対応すると判断できなければ正答にならない。だからこそ先に(1)で考えてから(2)に取り組む順になっている。つまり、(2)は③と資料4に触れなくても正答できる問題であるが、(1)は③と資料4を結び付けなければならぬために正答できなかったということではないだろうか。

複数資料の対応を判断することが鍵になるという意味では、中学校3年生で課題が見られた[1四]にも当てはまるポイントである。こうした問題は、教員が共有するのみならず、児童生徒に理解してもらいたい機会をつくっていただきたい。

【ちらし】(更新版②)

第一中学校 美術展

毎年、秋に行っている第一中学校の美術展のお知らせです。
私たちが美術の時間につくった作品を展示します。どれもかいしんの出来です。
今年は、中学生による作品の説明や小学生向けの体験コーナーもあります。

日時 令和7年11月15日(土) 10時～16時
場所 第一中学校 体育館
会場図

体験できる時間(各回30分間)
①10時～ ②11時～ ③12時～ ④13時～
中学生と一緒に、好きな色のタイルを貼って自分だけのペン立てをつくることができます。

第一小学校6年生のみなさんへ

四 今年の美術展では、昨年の美術展に会場した小学生の感想をもとに内容を工夫しています。中井さんは、そのことを【ちらし】(更新版②)の□の部分に書き加えることにしました。あなたならどのように書き加えますか。次の条件1と条件2にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 今年の美術展の【工夫】のA、Bから1つ選び(どちらを選んでもかまいません)、それと結び付く小学生の【感想の一部】をAからUまでの中から1つ選び、それぞれ塗りつぶすこと。

条件2 条件1で選んだ、今年の美術展の【工夫】と小学生の【感想の一部】との関係が分かるように、接続する語句や指示する語句を使って書くこと。

※ 次のページの枠は、下書きに使ってもかまいません。
解答は必ず解答用紙に書きなさい。

中学校[1四]の問題(抜粋)

3. 秋田県学習状況調査の課題の改善

全学年に共通して漢字や文法に関する問題に課題が見られる。これらは、他の漢字と字形・字音・字義が紛らわしい等の原因に当てはまる既習漢字を復習することで、かなり改善するであろう。

ここでは特に、小学校5年生、中学校1年生、2年生に共通する課題である「C読むこと」の問題のうち、小学校5年生と中学校1年生の問題を取り上げる。

小学校5年生では、通し番号(15「必要な情報を見付け、論の進め方を考える」)に課題がある。『動物の体と気候』について話し合っている児童の発言の白抜き部分に合う言葉を、本文の言葉を整理して記述する問題である。筆者が、動物の体を自然の「けっさく」だと表現している箇所(文章末尾の14段落)に気付かなければならない。「けっさく」を探し当てるには最後まで読まなければならない。さらに単純な抜き書きではなく、児童の発言に合わせて表現しなければならないが、「自然が動物を作り上げる」という比喻(活喩)を理解することが難しい。さらに指定字数に収めなければならない。

該当箇所を見付けて以降の思考は、「B書くこと」の力が求められている。いわゆる「条件作文」を取り入れなければならない。すぐに想起できる内容(「内情報」と言う)を、任意の分量で書かせる「生活文」だけでなく、資料から収集してきた内容(「外情報」と言う)を、指定された形式で簡潔に述べる訓練が必要になる。

中学校1年生では、通し番号(16、(17「必要な情報に着目し、文章の内容を捉え

る」)に課題がある。小学校5年生とほぼ同じ能力が測られている。「クジラの飲み水」について話している生徒の発言の白抜き部分に当てはまる言葉を、指定された文字数で本文から抜き書きしたり、本文の言葉を整理して指定字数以内で記述したりする問題である。正答に至る思考過程は小学校5年生と同様であるが、(17では、クジラが体内の水分を失う3原因のうち、「排泄」以外の「呼吸による気化(不感蒸泄)」と「発汗」について、本文の末尾(18段落中の17段落)から該当箇所を見つけて、二つをつなげて短く言語化しなければならない。話し合いの生徒の発言にある「海は湿度が高い」も「クジラに汗腺がない」も、不感蒸泄が抑制されることや発汗が起らないことの原因であり、「原因の原因」という点がややこしい。さらに、生徒は白抜きの直前の「発汗がない」のみに着目してしまい、それより前の「湿度が高い」を「見逃してしまう可能性が高い」。

発言であれ段落の内容であれ、要約しながら読み、当該の内容が他者の発言や文章全体の内容、前後の段落の内容とどう関係するのかを判断しながら読むことが求められる。端的には、見出しを付けながら理解することである。ただし、この見出しは内容を要約する段階(内容要約見出し=文章の中に言葉がある)から、当該発言や段落が全体の中で担っている役割を判断して付ける段階(役割見出し=文章の中に言葉がない・読み手の判断を表す言葉)に進めることが肝要である。

提言のまとめ

- 全国学力・学習状況調査、県学習状況調査から見られた課題を丁寧に分析し、教員間、学校間で共有し、実践を通して改善を図ること。
- モデル校の取組に見られるような授業改善・学習改善の視点を、教員だけでなく児童生徒も自覚できるよう共有を図ること。

<提言①～④ 出典一覧>

提言① 加藤 慎一 氏

秋田県教育委員会（2025a）。「令和7年度秋田県学習状況調査 調査問題（小学校第5学年 算数）」。
秋田県教育委員会（2025b）。「令和7年度秋田県学習状況調査 調査問題（中学校第1学年 数学）」。
文部科学省・国立教育政策研究所（2025a）。「令和7年度全国学力・学習状況調査 調査問題（小学校算数）」。
文部科学省・国立教育政策研究所（2025b）。「令和7年度全国学力・学習状況調査 調査問題（中学校数学）」。
中島健三（1981）。「算数・数学教育と数学的な考え方－その進展のための考察」, 金子書房。

提言② 原田 勇希 氏

秋田県教育委員会（2025c）。「令和7年度秋田県学習状況調査 調査問題（中学校第1学年 理科）」。
文部科学省・国立教育政策研究所（2025c）。「令和7年度全国学力・学習状況調査 調査問題（小学校理科）」。
文部科学省・国立教育政策研究所（2025d）。「令和7年度全国学力・学習状況調査 調査問題（中学校理科）」。

提言③ 佐々木 雅子 氏

秋田県教育委員会（2025d）。「令和7年度秋田県学習状況調査 調査問題（中学校第1学年 英語）」。
秋田県教育委員会（2025e）。「令和7年度秋田県学習状況調査 調査問題（中学校第2学年 英語）」。

提言④ 成田 雅樹 氏

秋田県教育委員会（2025f）。「令和7年度秋田県学習状況調査 調査問題（小学校第5学年 国語）」。
秋田県教育委員会（2025g）。「令和7年度秋田県学習状況調査 調査問題（中学校第1学年 国語）」。
文部科学省・国立教育政策研究所（2025e）。「令和7年度全国学力・学習状況調査 調査問題（小学校国語）」。
文部科学省・国立教育政策研究所（2025f）。「令和7年度全国学力・学習状況調査 調査問題（中学校国語）」。

令和8年度 学校改善支援プラン

学力向上に関する資料

これまでの「学校改善支援プラン」



<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/87770>

◇秋田県公式ホームページ「美の国あきたネット」
(<https://www.pref.akita.lg.jp>)にて配信
しています。

わか杉学びネット



<https://common3.pref.akita.lg.jp/manabi/>

・家庭学習に活用できる問題シート
・ICTを活用した教育に関する資料や動画、リンク 等

令和7年度秋田県検証改善委員会 ICTを活用した授業力向上事業に係る委員一覧

※敬称略 令和8年3月現在

成 田 雅 樹	秋田大学大学院教育学研究科教授	伊 藤 悟	義務教育課長
佐々木 雅 子	秋田大学教育文化学部教授	佐 藤 孝 子	北教育事務所主任指導主事(兼)チームリーダー
加 藤 慎 一	秋田大学教育文化学部講師	津 島 穰	中央教育事務所主任指導主事(兼)チームリーダー
原 田 勇 希	秋田大学教育文化学部講師	住 吉 聡 子	南教育事務所主任指導主事(兼)チームリーダー
藤 村 裕 一	鳴門教育大学大学院学校教育研究科特命教授	真 崎 敦 史	義務教育課チームリーダー
近 藤 均	八峰町教育委員会指導主事	須 田 輝 樹	義務教育課副主幹(兼)サブリーダー
小 番 弥生子	由利本荘市教育委員会指導主事	佐々木 修 一	義務教育課副主幹
伊 藤 知 巳	美郷町教育委員会参事	村 上 丈 二	義務教育課指導主事
年 代 信 弥	八峰町立八峰中学校長	佐 藤 整	義務教育課指導主事
吉 田 哲 哉	由利本荘市立鳥海小学校長	藤 原 正 貴	義務教育課指導主事
田 村 佳久美	美郷町立仙南小学校長	矢 吹 敦	義務教育課指導主事
		吉 田 茂 樹	義務教育課指導主事
		岡 本 菜 緒	義務教育課主事

本冊子では、一部 Google Gemini により作成したイラストを使用しています。